

豊臣系城下町の発展過程からみた大和郡山の初期町人地

——長浜・近江八幡から大和郡山へ——

渡　　邊　　秀　　一

はじめに

近世城下町プランの基本形はわずか40～50年ほどの織豊期に城郭の近世化^①、城下の近世化という二つの段階を経て成立した。城郭の近世化が織豊期前期に始まったのに対して、長方形ブロック・短冊地割型の土地区画^②の成立や「タテマチ」から「ヨコマチ」への変化^③などを通して実現された城下の近世化は織豊期後期の豊臣系城下町において進行的な進行した。

豊臣系城下町のうち豊臣秀吉とその一族が建設した城下町は畿内とその周辺に多いが、長浜や近江八幡・伏見は徳川政権下で在郷町に変質し、大坂、姫路など城下町として存続したのも徳川政権下において大きく都市形態を変えている。それゆえ、城下の近世化の様相はおおむね明らかにされているとはいえ、個別的に見れば豊臣期の都市計画は不明な点が多い。城下の近世化に関する論議の中で取り残された課題がここにあるといえよう。

大和郡山は廃城・再建の後も豊臣期の都市計画を受け継いだといわれている^④。その真偽はなお検討を要するが、大和郡山の基本的な都市計画は徳川政権下においても変わらなかったと考えられる。したがって、大和郡山は豊臣系城下町の一つとして城下町の近世化を考える上で、そして初期の都市計画を考える上でも格好の考察対象となる。

う。城下町大和郡山の成立過程については『大和郡山市史』⁽⁵⁾（以下、『市史』）などの自治体史に詳しく、近世大和郡山の形成史に関する論考の多くは概ね『市史』にしたがって記述されてきた。⁽⁶⁾ それによれば、本格的な城郭・城下の建設が始まったのは筒井氏の後を受けて豊臣秀長が入城した天正13（1585）年からである。本稿の主な考察対象である町人地に限って言えば、天正16（1588）年に14町、地子免除が実施された天正19（1591）年には20町が成立しており、この段階で大和郡山の主要な町人地がそろっていた（図1）。しかし、大和郡山も天正16（1588）年以前の初期町人地については、ほとんど知られていない。そこで、以下では長浜および近江八幡を例に豊臣系城下町における城下の近世化の過程をあらためて確認したうえで大和郡山町人地の都市計画上の特色を位置づけ、その初期町人地の計画について若干の考察を試みたい。

I 豊臣系城下町における町人地の特色

（一）長浜における町人地のブロック・屋敷割

町人地における都市計画の基本的枠組みは、街路とそれによって区画されるブロック、そして町割・屋敷割である。豊臣系城下町の中では大坂が120間×40間、裏行20間⁽⁸⁾になっているが、天正15（1587）年に天正地割が施工された博多では120間×30間⁽⁹⁾、天正19（1591）年に天正地割が施行されたといわれる京都および文禄3（1594）年に建設された伏見では60間×30間（120m×60m）となっている。ブロックの長辺では120間と60間とがあるが、前者は後者の倍数であり、基本的に大きな違いはないというべきであろう。これに対して裏行は大坂のみが20間で、他の3都市は15間⁽¹⁰⁾となっている。しかし、いまここで重要なのは各城下町のブロックの長辺・短辺の長さそのものではなく、豊臣系城下町においてグリッドパターン（格子状）の街路網とそれに囲繞され

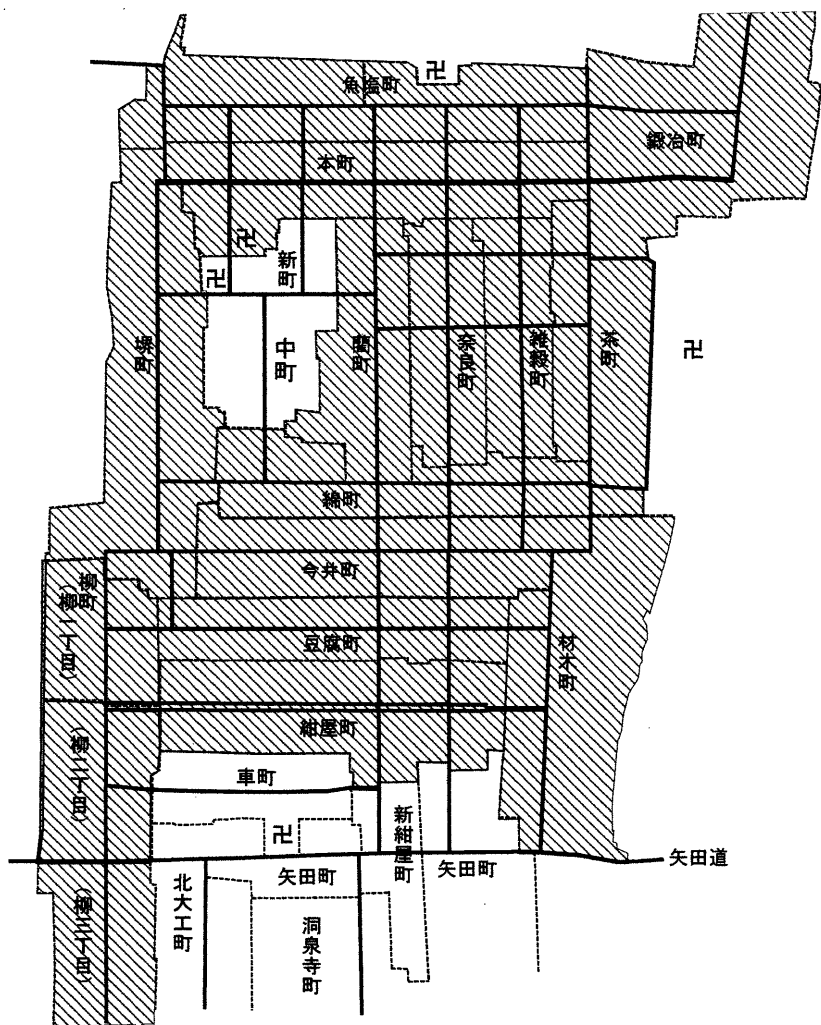


図1 町人地主要部の町割と成立時期

- 天正16年までに成立した町
- 天正16～19年までに成立した町（新町・中町を除く）
- 町界

た方形ブロックの形成、ブロック内部における短冊地割の実施であり、そしてそれらを通して町人地の画一性を志向し、定型化していく点である。

豊臣系城下町の出発点は、天正2（1574）年に建設が開始された近江長浜である。長浜は天正18（1590）年以降に廃城・再建・廃城という複雑な歴史をたどったためか、不明な点も多い。図2は明治6（1873）年「長浜町地籍図」に基づいて、長浜町人地における街路構成とブロックの形態を示したものである。図中のXの延長上に大手町があり、その延長上に長浜八幡宮が位置している。また、Yはいわゆる北国街道である。長浜の主要町人地は天正19（1591）年に300石の地子免除を受けた区域であるが、その中で比較的規則的な街路網が形成されているのがA—D・E—H間である。

図2を見て明らかのように、長浜のブロックには異なる二つの型がある。一つは長辺と短辺との差が小さい正方形に近い形状をもつブロックで、町人地主要部では大手町域および魚屋町域を含む8ブロックがこれに該当している。これらのブロックは不等辺四角形で、中央部（B—D間）8ブロックについて「坂田郡第16区长浜町図（トレース図）」⁽¹³⁾を見ると、東西方向は57〜60間でほぼ同規模であるのに対して、南北方向は城郭から遠ざかるにつれて37〜39間、42〜43間と順次大きくなっていく。このように長浜町人地中央部の幾何学的な街路構成とブロックの形成は不完全であるが、以下では便宜的に正方形ブロックとして扱う。これに対して、もう一つの型は町人地縁辺部に分布する長方形ブロックである。長浜では主にD—E間とそれに接するY部分、町人地南端に当たるZ部分の3ヶ所に分布している。Y部分は長浜城外堀部分に接する変形部分であると考えられ、Z部分は正確な長方形をなしていない。このように、正方形ブロックが町人地中央部を占め、長方形ブロックがそれを圍繞するかたちで縁辺部に分布することは、この二つの区域の成立時期が異なり、正方形ブロックの区域から長方形ブロックの区域へと町人地が拡大されていったことを示している。⁽¹⁴⁾

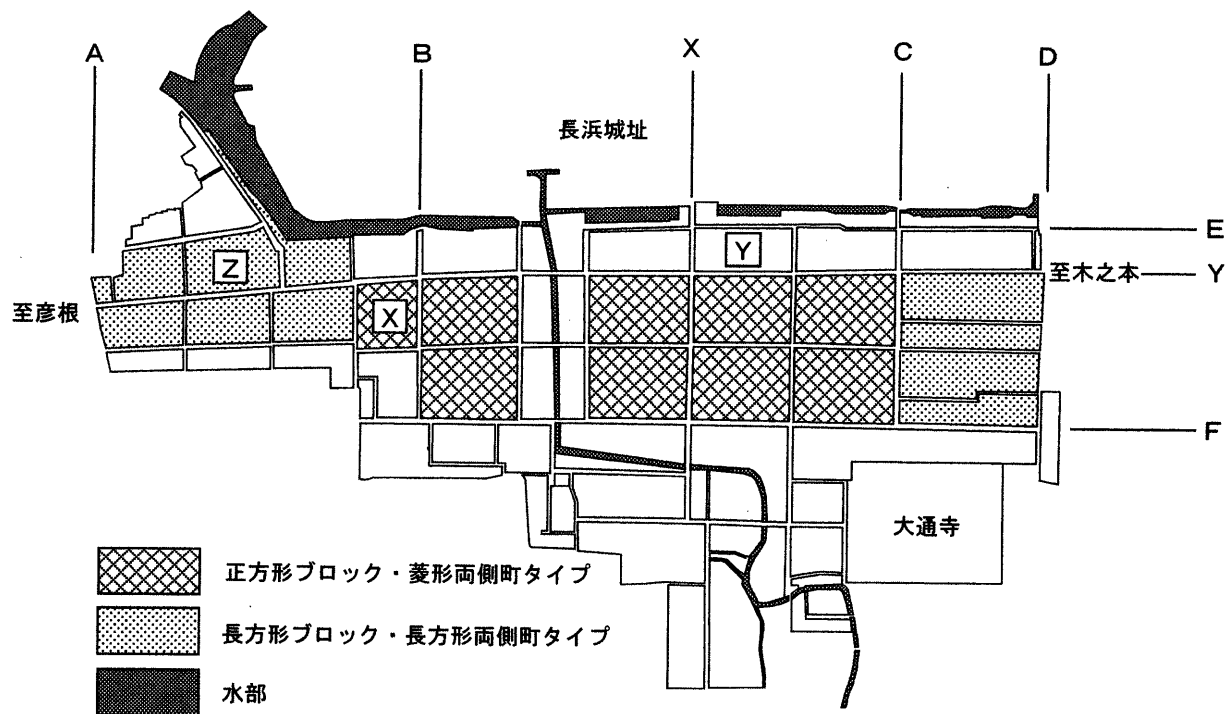


図2 長浜町における街路構成とブロックの形態
(明治6年「長浜町地籍図」に基づいて筆者が作製)

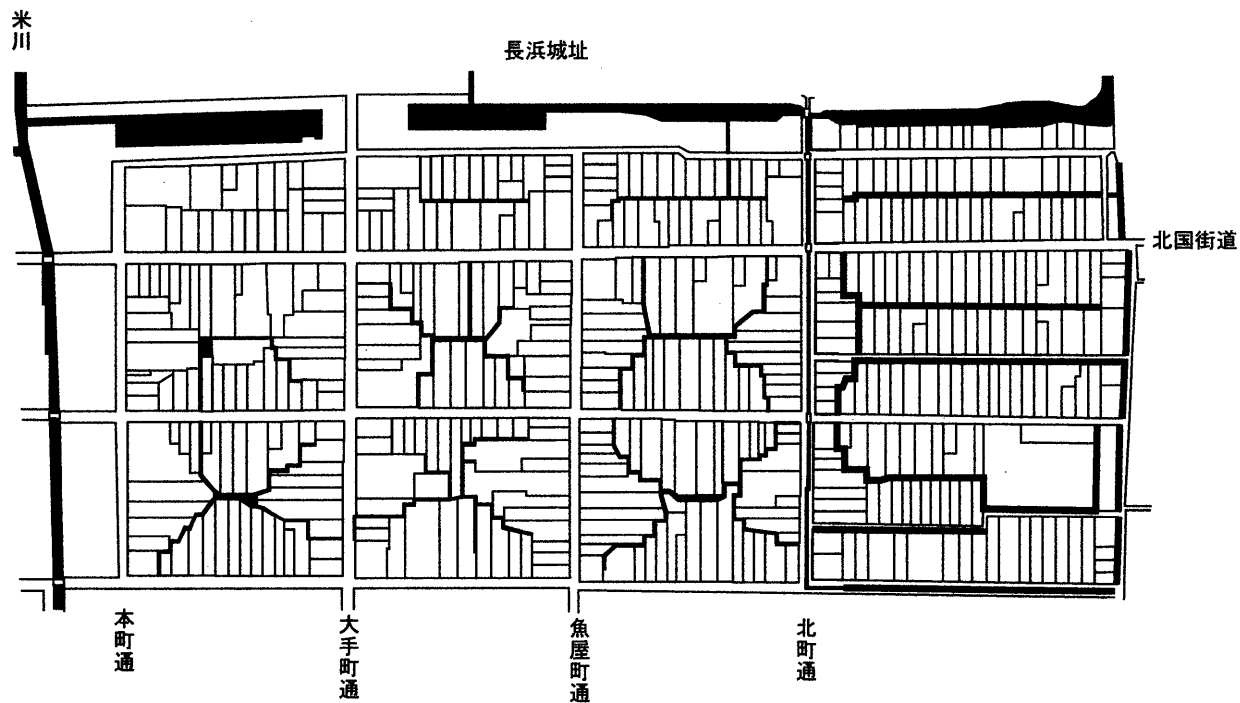


図3 長浜主要町人地における屋敷割
 (「長浜町地籍図」による)

こうした成立時期の差異は各ブロックにおける屋敷割にもうかがえる。図3は大手町を含む長浜の主要町人地における屋敷割を示したものである。長浜は「タテ町型」の町人地を形成したといわれている。しかし、屋敷割からみると、一筆一筆は短冊型の地割であるが、その集合形態は中世的な四面町や四丁町の屋敷割と同じである。四丁町は本来片側町であるが、長浜では街路を挟んで両側町をなし、四丁町から一步発展した姿を示している。この四丁町から発展した両側町を表す用語がないため、ここでは仮に四丁町系両側町と呼ぶが、この四丁町系両側町は方形ブロック・短冊型地割の前段階において成立した町の形態であるといわれている¹⁵。同様の屋敷割は奈良においても確認でき、天正年間（1573～1592）から慶長年間（1596～1615）までに成立していた屋敷割・町割と考えられている¹⁶。正方形ブロックの近世的屋敷割としてよく知られているのは矢守一彦が言う江戸型であるが、長浜の屋敷割りは江戸型というより奈良のそれと同じで、前近世的である。その意味で、長浜は近世的町人地への過渡的な姿を一部に残している。

（2）近江八幡における町人地のブロック・屋敷割

近江八幡は天正13（1585）年に建設された城下町である。建設年は大和郡山と同じであり、湖東の条里地割が分布する地域に立地している。町人地の近世化を考える上で、また都市計画に対する条里地割の影響を考える上でも興味深い都市である。

近江八幡の町人地は中央部の新町筋を境に西部と東部で街区の形態が異なっている（図4）。新町筋以西では、一部に変形があるものの、街区の基本形は南北（長辺）70間、東西（短辺）45間、裏行22・5間の京型（長方形ブロック）屋敷割の短冊型であるといわれている¹⁷。また、ブロックの大きさについては南北約140m、東西約90mを基本すると記述したものである¹⁸。後者は明らかに前者の数値に基づいて1間約2mで換算したものであろう。

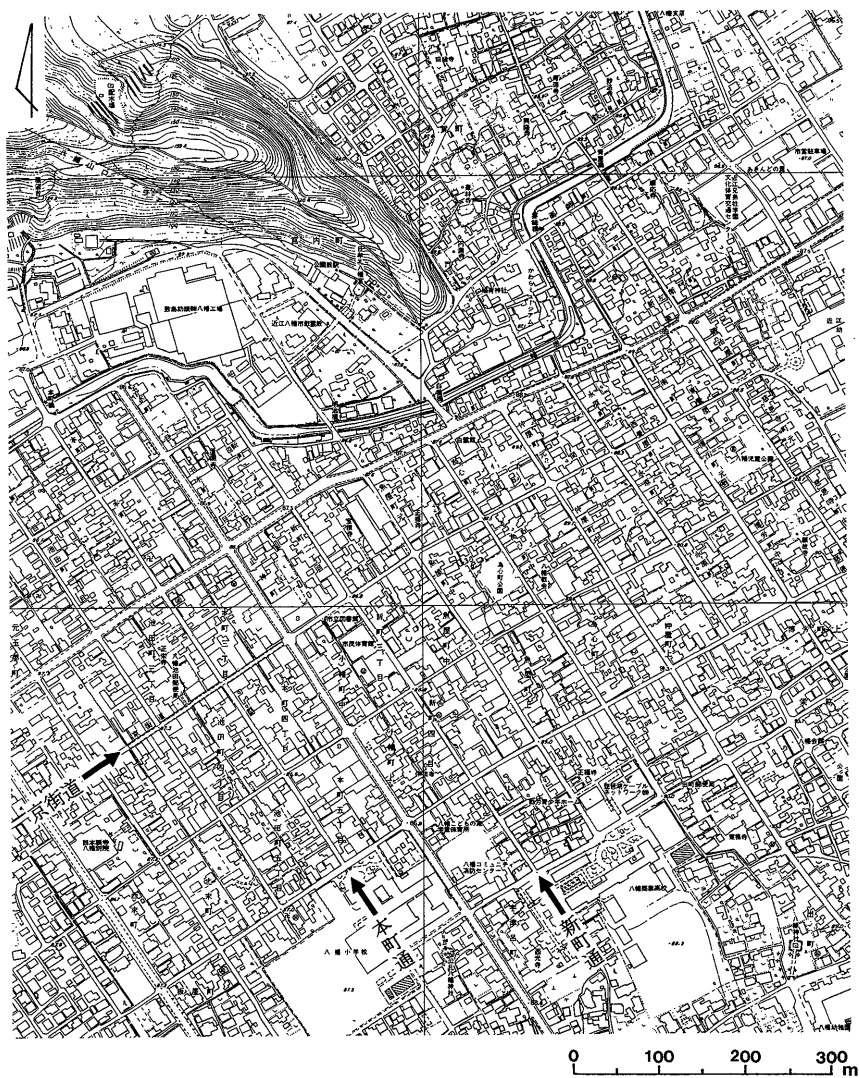


図4 長方形ブロックがつくる近江八幡の町並

2500分の1国土基本図で近江八幡中心部のブロックを計測してみると、長辺（南北）約125m、短辺（東西）約83mである。これが先の70間×45間に相当するものならば、それは1間＝6尺で算出したものである。しかし、天正年間の都市においては1間＝6尺5寸を基準としていた例が多く報告されている。¹⁹そこで、1間＝6尺5寸で約125m×約83mを換算すると、長辺63間2尺、短辺は42間（裏行21間）になる。一方、東部では東西街路が八幡堀に規制されて斜行しているため、変形街区（平行四辺形型）になっている。ただ、その長辺・短辺は西部の規格に近い。

近江八幡の屋敷割については短冊地割で、典型的な両側町を形成しているというのが一般的な考え方である。近世の八幡町絵図²⁰をみると、寺院が中央部を占めるブロックが若干あり、現在まで変わらずに残っている。ブロック中央部が空閑地や寺院などに利用される地割は矢守によって江戸型と名づけられ、京型とともに地割型の一類型とされている。²¹ただ、矢守一彦がいう江戸型は正方形ブロックである。長方形ブロックの江戸型地割ともいうべきブロックが存在するかどうか、なお検討を要する。しかし、近世絵図の中で、そして現状においても背割水路が街路と平行に南北方向に走っていることが多いという点を踏まえれば、現段階では典型的な長方形ブロックの短冊型地割が近江八幡において卓越することは認められよう。近江八幡において長方形ブロックの短冊地割型町人が成立したとすれば、それは博多・京都に先行する、城下町の近世化を考える上で重要な変化である。いづれにせよ、長浜から近江八幡へと展開する中で、街路網は不等間隔から等間隔へと変化し、その結果として大小さまざまな画性を認め難いブロックから、より画一性の高いブロックへとという変化を読み取ることができる。

II 大和郡山における町人地の先行地割と計画基準

(一) 町人地のブロック形態

前章で述べたように近世城下町に多く見られる長方形ブロックと均質な短冊地割からなる両側町は、京都に先駆けて博多や近江八幡で実施されていた。大和郡山はその近江八幡と同じ天正13（1585）年に本格的な建設が始まったといわれ、同様の都市計画が実施される条件はあったといえよう。そうした意味で注目されるのが、一辺24と25間の正方形ブロック、長方形ブロックが卓越する今井町以北・魚塩町以南の区域である。この区域は、天正16（1588）年までに成立していた14町の範囲にはほぼ該当し（図1）、豊臣期初期における町人地の範囲と考えられている。また、この区域では正方形・長方形のブロックで構成されている点から計画的な町人地の形成を窺わせ、そのいずれにおいても短冊地割の両側町が形成されている。ブロックの形状や屋敷割の特色という点で、近江八幡と同様に大和郡山にも画一化への志向性があったと認められよう。

しかし、大和郡山における都市計画の画一性は近江八幡には及ばない。その一因は魚塩町と今井町の区域に5種類のブロック形態が混在することである（図5）。そのブロック形態とは、①長方形ブロック、②正方形ブロック、③大型長方形ブロック、④小型長方形ブロック、⑤変形ブロック、である。①は近江八幡と同じ形状であるが、長辺の長さは一定していない。これも町人地の画一性を乱す要因の一つになったといえよう。②は長浜に見られた正方形ブロックとは大きさや屋敷割の点で異なり、約50m四方のブロックになっている。魚塩町・本町および綿町（部分）にみられるが、ブロックを限る街路は魚塩町と本町で微妙にずれて、食い違いになっている。また、先行地割との関係からも注目されてきたブロックである。③・④は①とともに長方形型であるが、長辺と短辺の差が小さく、とくに規模の大きい③はブロック状と表現してもよからう。③は新町・中町の見られるもので、④はそれに

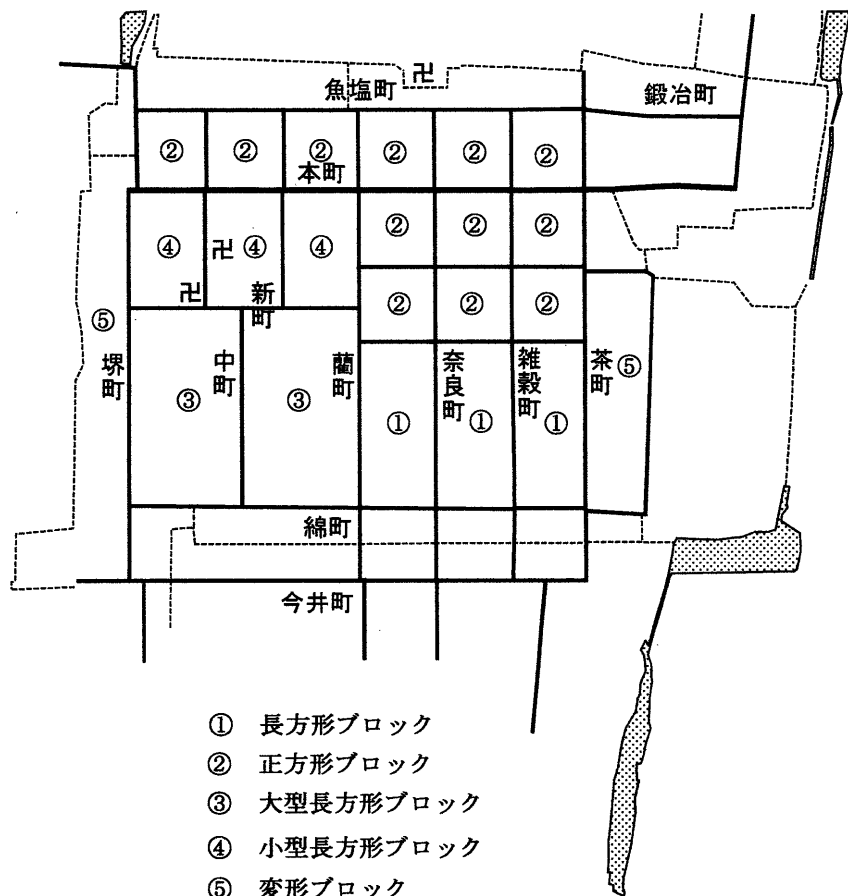


図5 郡山町人地におけるブロックの形態

接して分布し、北辺を本町通で限られている。⑤は内堀・外堀に規制されたブロックである。

(2) ブロックと先行地割の関係

大和郡山町人地の計画性、先行地割との関係という点について言えば、異なった二つの見解が存在している。その一つは条里地割を踏襲して区画されたというもので、『市史』をはじめ数多くの研究がそれに従ってきた²²⁾。しかし、近年になって条里地割を踏襲した区画が見られるのは今井町以南であって、今井町以北では平城京条坊地割を延長した形で区画されているとする新たな見解が出されている²³⁾。

条里地割の踏襲という点から特に注目されたのが、本町通・魚塩町通に見られる50m四方の正方形ブロックである。これについて『市史』は、裏行（短辺）12間に背割水路1間分を加えた25間を基本とし、条里地割は街路分を加えて、街路分1間＋裏行12間＋背割水路1間＋裏行12間＋街路分1間＝27間で2区画に区分されていると述べている（図6）。『市史』では1間の長さを示していないが、上述にしたがえば109m＝54間ということになる。仮に条里型地割における坪の一边約109mを1間＝6尺5寸で換算すると55間3尺3寸となる。『市史』との差は微妙なものであるが、背割水路の開口部を幅30～50cm（およそ1～2尺）とする報告²⁵⁾があり、これを考慮すればその差は2間1尺～2間2尺（約4・2～4・5m）に広がる。また、『市史』の説明の通りだとすれば1間の長さは2mを超えることになるが、1間＝6尺5寸の京間をこえるものを筆者は知らない。したがって、今井町北部の計画が条里地割を踏襲したという点は疑わしいといわなければならない。

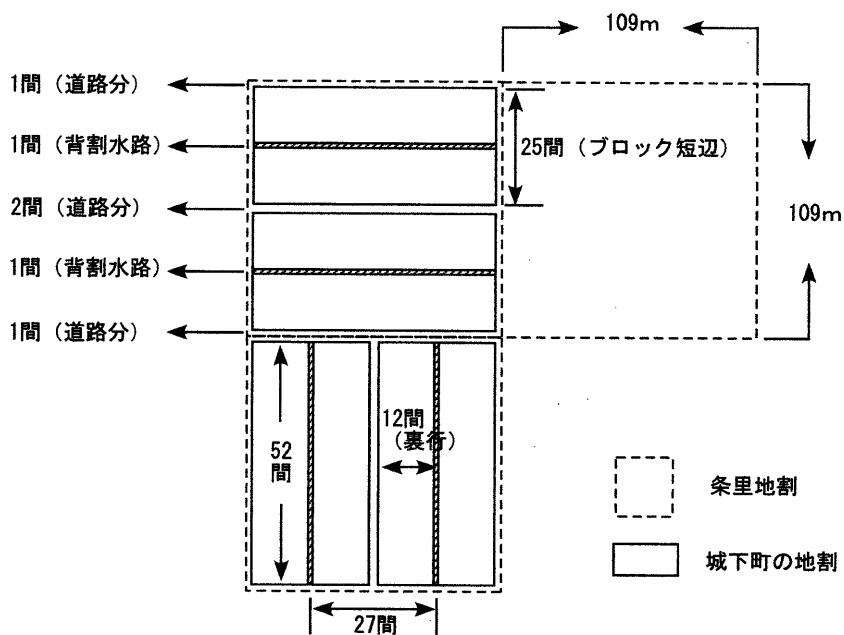


図6 条里地割と町人地の区画

III 大和郡山町人地における街路網と正方形ブロック

(一) 遠見遮断型の街路パターン

前章で述べたように、大和郡山における主要な町人地は短辺25間からなるブロックによって形成されていた。それが条里地割によるのか、あるいは条坊地割に由来するののかという点は大和郡山の都市計画を考える上で重要な問題である。しかし、本稿の分析視角からいえば、そこにはもう一つの論点が欠如している。それは、今井町以北の区域における正方形ブロックと長方形ブロックとの混在がどのようにして形成されたのかという点である。

矢守一彦によれば、正方形ブロックは天正・慶長期に成立した城下町に見られ、しかも建設当初の町割部分であり、その後の付加部分は長方形ブロックに移行していくという。⁽²⁶⁾ 豊臣期の大坂では、天正11(1583)年から建設された上町台地上の長方形ブロックに対して、正方形ブロックからなる船場が建設されたのは慶長3(1598)年のことである。したがって、すべての城下町に当てはまるものではないが、おおよそ正方形ブロックが先行し、後に長方形ブロックに移行する傾向があったことは認められよう。既に挙げた長浜はそうした城下町の一例である。

大和郡山の場合、正方形ブロックが連なるのは筒井時代の町人地ともいわれる本町通・魚塩町通⁽²⁸⁾と、綿町・今井町の一角である。したがって、矢守一彦が示した変容系列にしたがって考えれば、正方形ブロックの本町・魚塩町が豊臣秀長時代に形成された長方形ブロックの奈良町・雑穀町や綿町・今井町などに先行して作られた町人地であるということになる。しかし、正方形ブロックのみに注目しては、前節に挙げた③大型長方形ブロックの形成が説明できない。①長方形ブロックが天正13年前後の時期の豊臣系城下町に出現した新しいブロック形態であるとするれば、変形ブロックを除く②正方形ブロックと③大型長方形ブロックとを合わせてその成立要因を考えるべき

であろう。

そこで街路に注目し、今井町以北の区域を注意深く見ると、グリッドパターンの街路とは異なった食い違い街路が綿町通以北の大型長方形ブロックから正方形ブロックにまたがる区域に2ヶ所存在していることに気づく(図7)。一ヶ所は魚塩町・本町から新町・中町にかけて南北方向にのびるもの(A域)で、長さ76間の新中町通(O)に対して、北に長さ37間半あるいは65間の2本の街路(幅1間、B・C)が接続し、また新中町通の中央から南に長さ67間半の街路1本(E)が延びている。他の一ヶ所は新中町通から藺町・雑穀町にかけて東西方向に延びるもの(B域)で、A域が新中町通(O)を軸にしているとすれば、このB域は新町通とともに2間の道幅をもつ藺町通(O')を軸に作られている。藺町通(O')から東に25間を隔てて2本の街路(幅1間、B'・C')が東に延び、その中央から西に新中町通(E')が延びている。この2ヶ所では街路幅が街路構成上からみた各街路の位置関係が同一で、B域ではA域のパターンが時計回りに90度方向を変えて繰り返されていると認められるのである。仮にこの街路パターンを遠見遮断型と呼ぶと、グリッドパターンをなす街路が長方形ブロックを作るための街路構成であり、それが豊臣秀長在城期につくられたものならば、この2ヶ所の遠見遮断型街路はそれに先行して作られたものであると考えることができる。

(2) 遠見遮断型街路の広がりと正方形ブロックの形成

以上のように、新中町街路をはさんで見られる③・④の長方形ブロックは遠見遮断型街路に基づいて形成されたものでたものである。しかし、この街路パターンでは正方形ブロックを作ることはできない。遠見遮断型街路に直交する街路が加わって初めて正方形ブロックができるのである。

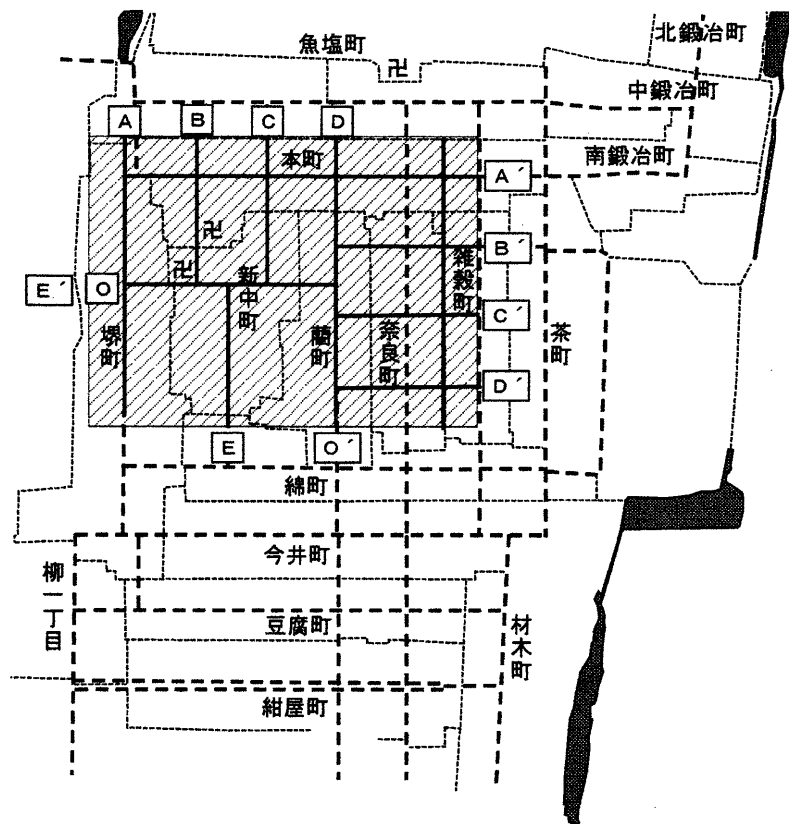
そこで、まず考えなければならない点は遠見遮断型街路に基づく町人地の広がりである。現状ではそれを確定す

るための直接的な手がかりがえられないため、二つの仮定を設けて考えてみたい。その仮定とは、第一に遠見遮断型街路がまったく同一パターンで繰り返されていることから、A域における広がりやB域においても繰り返されているとするものである。ここでA域を基準にするのは、B域では遠見遮断型街路の東西路に南北路が交差して正方形ブロックを形成しているのに対して、A域では正方形ブロックで占められることがなく、正方形ブロックに先行する③・④のブロックに代表されるより古いブロック形態が残っているためである(図7)。そして第二の仮定は、両側町によって町人地が出来上がっているというものである。

A域における軸を新町通(図7、O)とし北への広がりを見ると、以下の4つの選択肢がある。

- ア) 本町通までの37間半
- イ) 本町・魚塩町界までの52間半
- ウ) 魚塩町通までの65間
- エ) 魚塩町北界までの79間半

このうち、ア)・ウ)は他の二つの選択肢に比べ可能性が低い。なぜならば、本町あるいは魚塩町が外側に向かって表口を並べる片側町になるためである。また、藺町通を軸にエ)の長さを東に取ると、茶町通を若干こえて茶町東街区に入る。この茶町は街路の方向やブロック形態が外堀に規制されて変形し、東街区の裏行も他の町とは比較にならない大きさになっている。以上の点から、現時点ではイ)が最も妥当なものといえよう。この52間半を藺町通(O)から東に取ると、ほぼ雑穀町通になる。一方、街路Oから本町・魚塩町界まで延びる街路はAとDの4本である。仮にB・Cの2本がA域の街路で、両側街を形成していたとすると、東西の長さは街路分を含めて52間になる。しかし、この広がりや街路Oから東に取ると、A域とB域が分離してしまう。したがって、街路OにはAとDの4本の街路が延びていたと考えるのが自然であろう。この場合、東西の長さは街路分を含めて105間になる。



凡例



水部



遠見遮断型街路がつくる町



遠見遮断型街路

----- 江戸期大和郡山の町界

----- 江戸期大和郡山の街路

図8 遠見遮断型街路がつくる町

注1 図中の町名は豊臣期～江戸期のものである。

注2 図中の街路O及びA～E、O'及びA'～E'は、図7に対応している。

一方、新中町街路から南に向けては以下の選択肢が考えられる。

ア) 新町・綿町界までの48間

イ) 綿町通までの67間半

ウ) 堺町通・藺町通間の距離に当たる76間

このうち、イ)の綿町は豊臣秀長在城期にできた町であり、ウ)はその錦町を超えるため、ともに考えにくい。それゆえ、三つの選択肢の中ではア)が最も妥当なものということになる。しかし、A域における街路O以北の広がり、B域における街路O'以东の広がりになることから、B域は南北105間で、街路O以南の長さは51間半になる。アの48間とこの51間半のどちらが適切かを判断する材料はないが、A域のパターンが完全に繰り返されるといふ仮定にしたがって、ここでは51間半としておく。以上の結果に基づいて遠見遮断型街路が作る町人地の広がりを図化すると、図8のようになる。

図8に基づいてB域における正方形ブロックの形成を考えると、新たに奈良町街路・雑穀町街路・茶町街路の3本が敷設され、既存の東西街路(A'・D')とグリッドパターンを作り出したことによるものであることがわかる。そして、奈良町・雑穀町は街路B'・C'に沿って東西方向の両側町であつたものが南北方向の両側町に作りかえられたことも指摘できる。

おわりに

本稿では、近世城下町大和郡山を町人地から見た豊臣系城下町の発展過程の中に位置づけ、初期町人地の街路パターンと町人地の広がり、そして豊臣秀長による都市改造を考えてきた。その結果をまとめると、以下のような

る。

① 大和郡山における正方形ブロックは、その規格から条里地割に基づくものとはいえない。
 ② 豊臣秀長による城下町建設が本格化する以前に遠見遮断型の街路パターンを繰り返す街路網があり、町人地が形成されていた。その町人地は江戸期大和郡山城下の本町・魚塩町界から綿町通北まで、東西は堺町から雑穀町通りまでである。

③ 豊臣秀長はこの既成町人地の藺町通以東に、奈良町通・雑穀町通・茶町通を南北に通して正方形ブロックを作るとともに、東西方向の両側町であったものを南北方向の両側町に改造した。

④ 正方形ブロックは、既成町人地を残しつつ、南北方向の長方形ブロックの形成を計ったために出来上がったものであり、その意味で豊臣秀長の大和郡山改造は長方形ブロックと短冊型の屋敷割からなる豊臣系城下町の特徴を備えている。しかし、大和郡山には既成町人地があり、一部をほぼ旧態のまま残し、また一部を改造するという方法を取ったため、近江八幡ほど画一的な町人地の形成はできなかった。

大和郡山に限ったことではないが、近世城下町の建設初期の状況を記した史料は乏しい。とくに初期町人地に関する史料は皆無に等しいといつてよい。本稿では①～④のような結果を得たが、それは幾つかの仮定に立って考察を進めた結果として得られたものである。したがって、本稿の内容は歴史地理学的方法による推論あるいは試論ともいうべきものであり、検証可能な史料を欠いている。しかし、本稿が初期大和郡山の都市計画や都市構造についていくらかの知見を加え、今後の議論の契機となれば幸いである。

- (1) 織豊系城郭の特色は虎口の構造から説かれることが多いが、都市形成上の核、権力の所在という点から見れば、権威・権力の象徴としての天守の成立がより重要である。
- (2) 矢守一彦は町割におけるブロックの形状を「碁盤型・短冊型」に分けている（矢守一彦（1970）『都市プランの研究』、大明堂、p 308～309）。しかし、「短冊型」という表現は「短冊型地割」などと屋敷割の特色をとらえた表現として用いられるのが一般的になっている。そこで、以下では矢守一彦のいう「碁盤型」を正方形型、同じく「短冊型」を長方形型と呼ぶ。
- (3) 足利健亮（1984）『中近世都市の歴史地理』、地人書房、p 93～139。矢守一彦（1998）『城下町のかたち』、筑摩書房、p 33～47。
- (4) 柳沢文庫専門委員会編（1966）『大和郡山市史』、大和郡山市役所、p 804。
- (5) 柳沢文庫専門委員会編（1966）『大和郡山市史』、大和郡山市役所、p 792～804。
- (6) 例えば、藤岡謙二郎編（1977）『日本歴史地理総説 近世編』吉川弘文館、p 140～142。藤岡謙二郎（1981）『日本歴史地理序説 増補版』塙書房、p 235～250。大和郡山市教育委員会・奈良国立文化財研究所・環境事業計画研究所編（1981）『大和郡山市・城跡及び旧城下町等の保存と活用のための構想策定調査'81』、p 46～47、および p 94～95。亀井伸雄（1999）『日本の美術402城と城下町』至文堂、p 38～43。
- (7) ブロックは一般的に「街区」と訳される。ブロックは四周を街路で区画された区域であるが、町割された区域とは異なっている。町割された区域に対する適当な呼称がないため、以下では便宜的に街路で区画された区域をブロック、町割された区域を街区と呼ぶ。
- (8) 宮本雅明（1993）『大坂城下町の形成』（高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、所収）、p 132～133。
- (9) 宮本雅明（1989）『空間志向の都市史』（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』、東京大学出版会、所収）、p 66～69。
- (10) 前掲（3）、p 118。
- (11) 長浜市蔵『長浜町地籍図』（明治6年）。
- (12) 長浜における地子免除地の範囲については彦根藩によるものが知られているが、長浜城内を含んでおり、豊臣秀吉の免除地を継承しているとはいえず、同一ではない。現在、秀吉時代の免除地の正確な範囲は不明である。
- (13) 市立長浜城歴史博物館編（1987）『湖北の絵図―長浜町絵図の世界』、市立長浜城歴史博物館、p 95。
- (14) 前掲（2）、p 317～319。
- (15) 前掲（3）足利、p 143～148。
- (16) 猪又規之（1990）『奈良町』（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 II 町』、東京大学出版会、所収）、p 206～208。土本俊和（1993）『奈良町の形成』（高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、所収）、p 150～151。

- (17) 前掲(2)、p 310。
- (18) 前掲(7)、亀井、p 35。
- (19) 例えは、小川保(1988)「近世都市における宅地の境界とその変遷―京都の町を事例として―」(稲垣榮三先生還暦記念論集刊行会編『建築史論叢』、中央公論美術出版、所収)、p 302~310。
- (20) 「江州蒲生郡八幡町惣絵図」(原田伴彦・西川幸治・矢守一彦編(1978)『近畿の市街古図』、鹿島出版会、所収)
- (21) 前掲(2)、p 308~309。
- (22) 例えは、前掲(6) 藤岡謙二郎編(1977)、p 140~142。
- (23) 宮本雅明(1993)「畿内城下町の形成」(高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、所収)、p 160~161。
- (24) 前掲(6)、p 803~804。
- (25) 前掲(7) 大和郡山市教育委員会・奈良国立文化財研究所・環境事業計画研究所、p 54。
- (26) 前掲(2)、p 317~319。
- (27) 前掲(8)、p 132。
- (28) 『歴史地名体系30 奈良県の地名』(2001、平凡社)では本町・魚塩町を筒井時代の町とする。その根拠は明確ではないが、町名によるものと思われる。一方、黒板昌夫は天正16年の14町以前に8町の時期があったことを主張している(黒板昌夫(1972)「大和郡山城とその城下町試論」、国士館大学人文学会紀要第4号)。